トピックス
1. フィリピン災害支援
2. 節分　大寒～立春の頃

福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福　留　　章

龍　馬　通　信

No. 26
2020 年 2 月号

節分　大寒～立春の頃

２月３日は季節の分かれ目、節分。本来、立春・立夏・立秋・立冬の前日をそれぞれ節分と言っていたが、特に立春の日は春の到来をお正月と呼ぶ新年の始まりとして重要視され、今日だけを節分と呼ぶようになりました。

節分に豆をまくのは、平安時代の宮中行事であった。邪気払いの風習「追儺（ついな）」をルーツとして、魔（ま）を滅（め）するという語呂合わせで、１４世紀ごろから始まったようです。

今日は日本全国でそれぞれの地方に合わせて「鬼は外、福は内」の掛け声が響き渡ります。鬼を追い払った後は、福を招き入れる習わしが待っています。年の数だけ豆を食べる（年取り豆）。大阪の老舗寿司店で生まれ近年、盛んになった「恵方巻き」。鬼が嫌いなイワシの頭を軒先につるしたり、イワシそのものやつみれを食したりします。

新暦の２月は寒さの真っただ中。１年中で最も寒さの厳しい時期にあたります。そんな厳しい季節を耐えて暖かい春の到来を待ちわびる心を、古人は節分の行事に織り込んで生き抜く知恵と勇気を持つよう呼びかけたのでしょうか。

私は前の年男の年（６０歳、平成２０年）から播磨の国総社射楯兵主神社で福男として豆まきに出席させていただいています。今年も出席の予定で、自分も含めたたくさんの人たちに福をお配りしたいと思います。

※大寒　１月 20 日頃。

※立春　２月４日頃。

随筆　『龍馬と私』　～　龍馬「学ぶ」　河田小龍　～

江戸で最初の剣術修行から土佐に戻った龍馬は、直後の安政元年（１８５４年）秋。画家で当時土佐一番の教養人といわれた河田小龍を訪ねた。ここで海外、世界の情勢に触れて多いに触発される。小龍は藩命により２年前に土佐に帰国したジョン万次郎の取り調べを担当した。彼の江戸や長崎遊学の経験があったための下命であったものと推察される。

河田　小龍
１８２４年～１８９８年
（文政７年）　（明治 31 年）

その後、万次郎から聞き取りをした世界情勢を「漂巽記略（ひょうそんきりゃく）」にまとめる。上陸した島々での無人島生活の後、アメリカの捕鯨船ジョンホーランド号に救出されるまでの状況、彼らの航路を示した世界略地図、島々の略地図、ハワイ国オアフ島ホノルルの事情、米国滞在中の状況、汽車や汽船の図、説明、琉球を経て帰国するまでの経過などを記述。この取材の為、小龍は万次郎を自宅に２か月間居候させている。これだけの情報を見て聴いた龍馬のカルチャーショッ

クは相当大きいものであったに違いない。龍馬は大きな転換点に立った。黒船が来航したら異人の首をとるとの発想は消失し、日本を守るためには船と操船できる人材の確保が不可欠との思いに至る。龍馬と小龍はこの時、ある密約を交わす。

「君（小龍）は内にて人を作り、僕（龍馬）は外にありて船を得るべし」

小龍は龍馬に「下等人民（上士以外）の秀才」を紹介することを約し、その後、実現させる。安政２年には近藤長次郎、新宮馬之助、長岡兼吉など後に亀山社中、海援隊のメンバーになる若者たちを龍馬のもとに送った。この時の密約が亀山社中、海援隊の基礎を作ったといっても過言ではない。龍馬２０歳、小龍３０歳のときであった。

テントに横たわる老女に涙…。　～フィリピン　タール火山大噴火～

2020 年 1 月 14 日、昼頃、その第一報は私が所属する姫路大手前ライオンズクラブ会長西川氏からの電話であった。12 日（日）フィリピン・ルソン島タール湖の中央に位置する活火山タール火山が大噴火、13 日午前２時 49 分から４時 28 分にかけてマグマ噴火へ移行。溶岩が水平方向に飛び火山雷と地震を伴って島を大きく揺らした。周辺地域の住民約 8000 人が避難。パタンガス州当局は「災害事態宣言レベル４」を発令した。西川氏の知人（現地）からの連絡で噴火は続発しており、避難民も１万人から数万人に増加しているとの由。噴煙は北方向に流れ、首都マニラでも降灰があり、農作物への影響も懸念される。マニラではマスクの売切れが続出し、ほとんど品切れ状態。現地の支援スタッフや住民への配布がままならず、危機的状態であるという。

噴火直後のタール火山

まさにアラートである。社会奉仕委員長と兼務しているアラート委員長という立場からこの事態に協立して対処する使命を感じ、フィリピン行きを了承。幸いなことに 17 日昼のＬＣＣのマニラ経由シンガポール行きジェットスターが取れ、準備に拍車がかかった。救急物資は防塵マスク 4000 枚とタオル 1500 枚。大きな段ボール７個という大荷物になった。噴火後１週間もたたない時期に訪比など思いも及ばず、何かと不安いっぱいの旅立ちではあったが、（結果的にはその後火山活動が小康状態に入り特に危険な状態ではなくなったことと、お天気の良かったことで支援活動が順調にいった。）ただ宿泊先がコンドミニアムでサニタリー用品（シャンプー、歯ブラシ、ドライヤー）が充実しておらず、浴室もなくシャワーのみ。更に暑い国だけにシャワーは冷水の状態。四苦八苦したけれど、とにかく夜早く寝て、明日に備える。

救援物資のマスクとタオル

翌朝、３時半起床。４時にロビー集合。マニラより約 100 ㎞離れた１つ目の避難所、パタンガス市のスポーツセンター（5000 人収容）へ向かう。距離は特にたいしたことはないが遅々として進まない。被災後、初の週末ということもあり、各ＧＳなどはボランティアの待ち合わせなどでごった返していた。渋滞も激しく、至る所でノロノロ運転。時間ばかりが過ぎていく救援物資の多くは食べ物・飲み物で衣類・布団類もあった。皆、善意の人ではあったが、全く統制がとれた状態ではない。途中で地

タオルを配布する様子

テントの中で横たわる老女

避難所（スポーツセンター内部）

元のボランティア団体ＣＯＡＳＴ　ＧＵＡＲＤと合流した。てきぱきとした行動と避難所の責任者との面談など手際よく裁量してくれたので本当に助かった。スポーツセンターの責任者と会い、救援物資を預託。日本からの救援は初めてで、特にマスク・タオルは助かるとの事で随分と感謝された。せっかく日本から来られたのだからと言って直接避難民にタオルを配ることになり、先頭に立って配り始める。地元の人が並ぶように指示をしていただいたけれど、もはやひっぱりだこの状態で汗だくになりながら 1000 枚近くのタオルを配り切った。品質より日本風の柄が好評だったのかもしれない。一息ついて体育館の中に入る。競技をする部分にはテントが張られ、階段状の観覧席は数名のグループごとに場所を確保している。安全面でも衛生面でもやはり劣悪な状態で、思わず顔をそむける場面もあった。案内されてその中のテントの中を見た時、私は不覚にも涙をこぼした。そこに横たわる老女のやせ細った体。１人では起き上がれない状態で、ひたすら私の方を見つめている。２畳余りのスペースに娘さんと２人。所狭しとカバンやリュックのようなものが並んでいる。通訳を通じて挨拶はしたけれど、後どのような言葉を続けたらいいのか「頑張ってください」と呼びかけたものの何か寂しい気持ちでいっぱいであった。今もその情景が胸に迫る。昼食抜きで残りの予定をこなす。

２つ目の避難所、バウアン市の避難所（2500 名収容）、最後に被災地に一番近いアルフォンソ市の避難所（7300 人収容）へ向かう。16 時近くになって夕食を兼ねた昼食をとる。タール火山を見下ろすことができるフィリピン随一の観光地タガイタイのレストラン。火山から南側にあたり、特に被害はない。温かい食事をとりながら扉のこちら側と向こう側のあまりにも大きな違いを思う。タール火山はタール湖の中央に悠然とした姿を見せている。白い噴煙は上がっているが、大噴火の後とは思えない程、穏やかである。自然の営みの不思議さと無情さを感じざるを得ない。

19 日早朝に起きて一路日本へ。弾丸旅行の３日間、私にとって一生忘れ得ない３日間となった。私は今回のフィリピン行きを一時的なセンチメンタリズムや思い付きの奉仕活動にはしたくない。この経験を今後、個人的にもクラブ的にも奉仕の基本として体現していくつもりだ。

労災事故について

ここ最近の労災事故で多いのは、【ふとした瞬間に転倒する。】【何もないところで滑って転倒する。】などひとりひとりが気を付けていれば防げるような事故が増えているように思います。また【刃物に触れて手を切る。】【油の入った鍋に触れて火傷を負ってしまう。】など考えてみれば当たり前の事故も増えています。普段から身の回りの整理整頓をきちんと行い、床が濡れていることがあればその都度ふき取る、自分の行動が正しいのか判断するなど、小さなことですが気を付けるようにしましょう。また労災事故の手続きについてですが、**①健康保険証を使わない ②事故発生後、速やかに報告する**　この二点は社内で徹底するようにしてください。「会社に迷惑をかけてしまうから…。」と言ってご自身の保険証を使って受診する方がいらっしゃいますが、後々になって労災切り替えの手続きをすることはかなり煩雑です。必ず直属の上司や事務担当者に報告するようにしましょう。